K073
4

道徳二語教

米穀ハ人ノ命ニ不食ハ盛雲霞ニ不採

四季ノ風物ハ不美ハ小捕ハ百文

妻子ハ不養一味ハ不渇則上助

今是粥晩粥諸色即活ル

衣不蔽無完
無実の捉刑
義不言無食
無食の愚人
藏国米米数
恩愛の情
雖積千両金
不如一日食
以義常不在
御恵の虞人

有金不保
倹素同有金
身代日々衰
貧人彫々苦
若時不倹約
老後難飢寒
尚無仕拵
故合渋切倹
家業切怠時
除参通人

忠心至人働
雖積金不留
後如得石瓦
許畜積不施
惟如持土塊
武士学孫附
町人加業術
雖満金不家
能無米人若
猶如無仁乾

雖多米穀囲
於金人若
炊如彩雲
父母如田池
師長如米倉
親族如衣
妻妾如家
父母如宝
授学如薪
交友如一文

仇兵為化糞　女男交相對
人面獸心者　不異於毒蛇
人面獸心者　不異於毒蛇
不交三益友　何異於犬馬
不乘人馬馬　雖老必傳死

八丁埋沒地　主恩人不忘
愛二郎為樂　祭父母革不移
義他如骨肉　交情如蘭交
我側他人者　化人亦仇敵
己指人尻去　人亦指己尻

欲己利氣於
見他人之浮
風化人心弱
見後有偶行
好酒と抵掌

先令抗化人
那自先可帰
則人徒疾
雪天見怒止
雲如新要出

猥如醫術痴
浮雲易去
難高切傷心
夫易合難忘
又難深易求

貌如有義合
或始浅別味
或先言後安
最上之於業
立極と白米

但有家内妻
子ハけんやくと
雖不忘倹約
故奥方相場
足家年ゝ始

亦有子内養
必奥様手抱
先丁度ハ
田宝物忍無
道宝物教給

豊年舎誌

寿福幸種

一世ハ金銀米穀布此
五宝ハ世ハ谷の内ゝ
あげて数へ中ハ米
粗ハ妻ハ塩ハ合ハ味ハ

車に積て見て嘗て食と
ならば助ぜんと思ひたまふ
ばかりの釣れば米人徒
と知て一粒うかとも無来
り生べうば世人日に三
度の食すれば其人日に三
合宜しかるべし
全く米三百俵年に給ら
国恩ふるべし又海産
の三家として天より人を授
なる所あるべし勿論

一切万物の主宰として政のたゞしきを以て万民を指揮する自言

べからざると雖も中古も素戔嗚尊

美食遠酒ありてそこなふの世に移り抑いつる孫ありても素なくんば蓋

面白とされば唐土の素盞

と雖も清盛の時代迄も一日に二度の食事をなせしと

世のことなれば唐土の素盞

鹿食三度あるべきなれ中古

且菜粥を食して百年

たのしべ給ふも中されいとと

加之実に美食の素食

毒へ又晩食一口を減して

百年をたのつとも智恵の
中さえ〳〵るゆえ今より父母
の遺骸を大切に麁合
と思ひて養生をよく
天命をまつ保ん事を

米の高徳を仰ぎ一日三
度の食事を二度の粥に
あて給ふを能の
ゆゑ一椀の飯を
二椀の用をなす故に一日

仁義礼智の四徳を天照神
神のめぐみもあ
くまなく流れ
の守護と仰ぐ
べきものなる
そまつかたより
あらんや

五常
の五常

あつぎの論
かことは

一族は米を延べて一つ丸を
恩に報ぜんとて二つ丸を
胃と米に病ひを防ぐ三
丸を塩と塩一米代保つ
足と蔬食の三丸とい
ふ

ぐらとのつ
四大恩なり
あつぎとを
ち人分
すぐちに
大恩とのぐ
いにうりあけ
たその自分ふ
ちまるの
礼彼
ざるへ礼

仮令ば代りに考へるに
一人一日ふ分の延米と
あて十人千万人ふ
ゐて一日一年ふも
きべその延米数も知

露光量調整、重複撮影

K073-4

きゝ及ぶ程の成ものとなく
おろかなる世界の人
能これを心得延年法を
ひろめ国家を安ずべし
冨貴自然と来る

ものを安くあり度民間窮
の助とも可成べし独り我い
其徳ありて名世とあるべく
しかる子孫数家繁昌ひと

天保五甲午年正月吉祥日
江戸馬喰町二丁目
地本問屋 森屋治兵衛版

五国先人徳

露光量調整、重複撮影

K073-4

きゝ及ぶまで成長とゝいふく
れ〳〵ゑゝ世界の人
能これを心得延年法を
ゆゝ國家と家のづから
冨饒〳〵自然と来候

あるべきて成長の
りゝ成のの
ありさまり
君とあやの
恩の
仲の二法
二親ぞれの
志ひろく
せよ

五圓先人徳

を安くあり度氏の国家
の助とも言べし独る時へ
其徳ありて若世を安く
ゝし子孫教育疑ひと

天保五甲午年正月吉祥日
江戸馬喰町二丁目
地本問屋　森屋治兵衛版

994
2
9014